

教育最前線

連載 32

●自操安全運転プログラム

リハビリテーション中の方の運転復帰をサポートする安全運転教育



クルマの死角や正しい運転姿勢をインストラクターが説明

の運転席に山口さん、助手席に大島インストラクター、後部座席に建木さんが乗車。慣熟走行を十分に行った後、ブレーキングとパイロンスラロームに取り組み。ブレーキングでは30km/hで直線コースを走行し、指

運転復帰をめざし、リハビリ中の山口さん（56歳）は高次脳機能障害支援施設「ワークセンター大きな木」（静岡県浜松市）が実施している「障がい者のための自動車運転技能訓練プログラム」に加え、ホンダが実施している実車を使った「自操安全運転プログラム」を1月9日に交通教育センターレインボー浜名湖で受講した。

運転復帰によって 社会生活の幅が広がる

ホンダでは「より多くの人にクルマを操る楽しさを提供したい」「交通社会に参加するすべての人の安全を守りたい」という理念を实践するために、身体が不自由な方に車両運転時の安全性確保に向けた教育機会を提供している。その1つに、身体の不自由な方や障がい克服して運転復帰をめざす方を対象にした「自操安全運転プログラム」があり、ホンダの交通教育センターに導入されている。

「自操安全運転プログラム」は約1時間。交通教育センターレインボー浜名湖の大島インストラクターが同乗し、同センターのコース内で進められる。山口さんは2年ぶりに運転するという事で、運転を始める前に、あらためて正しい運転姿勢やクルマの死角について確認してもらった。そして、トレーニング車両

運転に必要な基本行動を実車走行により確認

「自操安全運転プログラム」は約1時間。交通教育センターレインボー浜名湖の大島インストラクターが同乗し、同センターのコース内で進められる。山口さんは2年ぶりに運転するという事で、運転を始める前に、あらためて正しい運転姿勢やクルマの死角について確認してもらった。そして、トレーニング車両

健さんは、「現段階では「運転は困難」と病院から判断された方に対するケアは充実しているとはいえない。公共交通機関が整備されていない地域にお住まいの方にとっては、クルマの運転は仕事や生活をしていく上で必要なことです。運転できることで、社会生活の幅が大きく広がります。つまり、リハビリをして運転に支障がないと判断されるまでの期間をいかに短くできるかが重要と言えるでしょう。リハビリ中の方に、少しでも安全にかつできるだけ早く運転復帰していただくために、医療機関、研究機関、支援施設と交通教育センターレインボー浜名湖との連携は不可欠です」と話す。

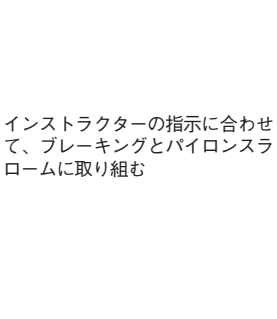


プログラムを始める前に、受講者の身体の状態などを確認

運転が楽しいとあらためて感じた

プログラムが終了し、受講した山口さんは「自分が思っていた以上の運転ができました」と笑顔を見せた。「うまくできなかったら、運転を断念する覚悟で臨みました。でも、自分の思い通りのハンドル操作ができ、あらためてクルマの運転は、とても楽しいと感じました。まだ速度の調整や安全確認に課題があることもわかったのですが、こうした訓練を重ねていきたいと思えます。運転を再開できたら、離れた場所にいる仲間と将棋をさすのが夢です」。

建木さんも「細かい操作や確認の状況を把握することができました」。



インストラクターの指示に合わせて、ブレーキングとパイロンスラロームに取り組み



ハンドル操作がスムーズにできるよう旋回ノブを取り付ける



久しぶりに実車を運転したということを考えれば、今日の運転状況は予想していたより良かったと思えます。山口さんの弱点を、大島インストラクターに理解してもらったので、今後はそれを克服するために個別のプログラムを検討していく必要があるでしょう」と、山口さんの運転復帰に向けて手ごたえを感じている。

最後に、大島インストラクターは山口さんに「今日は運転復帰に向けて第一歩ととらえて、地道にトレーニングを重ねてほしいと思います」とアドバイスした。

※1「障がい者のための自動車運転技能訓練プログラム」には認知訓練や「リハビリテーション向けの運転能力サポートソフト※2」を用いた訓練も含まれている。

TOPICS 1 リハビリ中の方の運転復帰に向けて 問題提議や課題解決のための意見を交換

1月24日、ホンダ青山ビルにて「リハビリテーション向け運転能力評価サポートソフト（以下サポートソフト）活用に関する意見交換会」が開催され、病院の作業療法士や大学の研究者など医療関係者14名が参加した。サポートソフトは、既に全国60カ所の病院やリハビリ施設が導入している。導入したいという医療関係者に、運転の再開を希望される方の交通社会への復帰に向けて問題提議や課題解決をするための場としていたことが、この意見交換会の目的である。

まず、参加者を代表して、聖隷三方原病院（静岡県浜松市）リハビリテーション部作業療法士の鈴木香葉子さんと、新潟医療福祉大学医療技術学部（新潟県新潟市）作業療法学科助手の外川佑さんが、患者の方の運転復帰を支援するための具体的事例を紹介した。そして、参加者が各々のサポートソフトの使用実態、収集したデータの活用方法などに関する情報や意見を交換。安心安全な運転の再開・継続について議論を深めた。



※2 リハビリテーション向け運転能力評価サポートソフト＝リハビリテーション中の方、作業療法士などと一緒に四輪での運転復帰に向けて運転に対する評価・訓練をサポートするためのソフト。運転環境の模倣的な再現により、運転操作の手足の複合的動作を楽しみながら行うことができる。詳細は下記ホームページを参照。
http://www.honda.co.jp/simulator/safetynavi/rehabilitation.html